

実践研究

肯定的コミュニケーションプログラム導入による自尊感情の変化  
－みやぎジュニアトップアスリートアカデミー事業－  
－第1報－

菊地 直子 久能 和夫 内丸 仁  
針生 弘 郡山 孝幸

Naoko Kikuchi, Kazuo kunou, jin utimaru, hiromu haryu, takayuki kooriyama: Changes of self-esteem intervene by Positive Communication Program -Miyagi Junior Top Athlete Academy project- The first report: Bulletin of Sendai University, 48 (1) : 13-21, September, 2016.

**Abstract:** In this study, attention was paid to self-esteem to verify the effects of "Positive Communication Program" introduced into academy students. Targets were 4<sup>th</sup> graders to 6<sup>th</sup> graders in Miyagi Prefecture and 30 pupils each were selected as advanced in physical strength and athletic capabilities. First, comparison was made if there have been any changes in self-esteem of the academy students between beginning of the term (Pre), one month later (Post1) and half a year later (Post2). Meaningful improvements were recognized in all the grades. Then, we did sampling on children in Miyagi Prefecture as control group and investigated a general tendency of the same graders in the prefecture. After inspecting how much of changes there were in self-esteem in the same period of time, we recognized no changes with 4<sup>th</sup> and 5<sup>th</sup> graders, and we saw significant improvements with 6<sup>th</sup> graders. Lastly, by comparing the changes of 6<sup>th</sup> graders of both groups, it has been recognized that self-esteem of both Pre and Post of the academy students were changing at higher level than the control group. This program has therefore shown to contribute to the improvement of self-esteem.

**Key words:** self-esteem Talent, Identify & Development Project, Exchange Diary  
キーワード: 自尊感情, スポーツタレント発掘事業, 交換日記

## I. はじめに

「みやぎジュニアトップアスリートアカデミー」は、仙台大学がH25年度からH30年度の6年間(契約は単年度)にわたり、みやぎ「夢・復興」ジュニアスポーツパワーアップ事業実行委員会より、事業に関するプログラム提供、及びそれに付随する業務の一切を受託し実施する

タレント発掘事業である。本事業は、宮城県内の小学4年生～6年生を対象に体力・運動能力に優れた児童を毎年30名選抜し、「～被災地からめざせオリンピック!～」を掲げ、将来、オリンピックや国際大会、国内トップレベルの大会で活躍するための資質を身につけるためのプログラムを実施している。より具体的な目標として、①オリンピック・国際大会のメダリスト

育成②国民体育大会の優勝者の育成③スポーツ指導者の育成(郷土愛の育成)④子どもの体力・運動能力の向上⑤競技力向上環境の醸成⑥トップアスリートとしての総合的資質の養成の6つを基軸としている<sup>9)</sup>。また、本アカデミーでは関係競技団体が実施する「競技体験プログラム」とトップアスリートとして必要な基礎知識をはじめとする様々な内容を「育成プログラム」とする大きく二つのプログラムを並行して行っている。本アカデミーの主となる育成プログラムでは、「知=かんがえる」「徳=おもいやる」「体=きたえる」を大きな柱とし、国内外の先進的な指導方法を活用して学習し、人間性を高め、宮城県の復興の担い手としての自覚を育むことをも目的としている。

なお、本アカデミーは、みやぎ「夢・復興」ジュニアスポーツパワーアップ事業の中で、スポーツに優れた素質を有する人材の競技力向上に資するプログラムとして位置づけられており、Fig.1のように整理することができる。

## II. 本研究の目的

本アカデミーの究極の目的は、トップアスリートたる資質を育むことである。本研究では、三つのうちの一つ「徳」プログラムの担う心理的な面の成長として自尊感情に着目した。自尊

感情の定義は、研究者によって異なる面があるとはいえ、自分自身に対する全体的評価感情の肯定性<sup>2)</sup>ともいえ、自尊感情の高さは自己を尊重し自分の価値を認めることを意味している。したがって、本番で実力を発揮することが必要不可欠なスポーツアスリートにとっては、自分を信じることができる「自信」と深く関連するし、非常に重要な感情といえる。しかし、内閣府の低年齢少年の生活と意識に関する調査<sup>10)</sup>の「自分に自信がある」という項目の回答では、小学生の約62%がそうではないと答えており、低い傾向が報告されている。さらに、日本青少年研究所の調査<sup>7)</sup>によれば、日本の青少年は「私は価値ある人間だと思う」「自分に満足している」において、米・中・韓と比較すると最も低いことが明らかになっている。また、同時に親の態度も調べられており、日本は諸外国と比較して子供に対して肯定的な態度で接していないこともまた明らかにされている。つまり自尊感情や自己価値観は、親の子供への肯定的な態度と深い関連があることが分かる。したがって、発達期の子供の自尊感情は、特に重要な他者である保護者や教員、コーチなどの肯定的な評価・態度に大きく影響を受け、自信を持って行動できるようになると考えられる。

そこで本アカデミーでは、H27年度より様々な「知」・「体」プログラムを学習、体験しつつ、

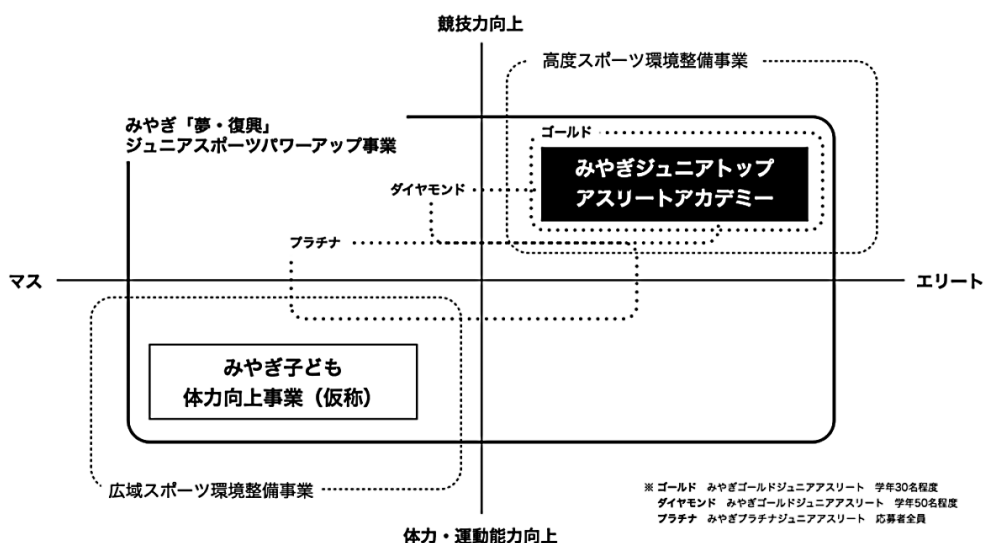


Fig.1 みやぎジュニアトップアスリートアカデミーの位置づけ<sup>9)</sup>

「徳」プログラムの一環として、重要な他者である保護者と連携して常日頃から肯定的な声掛けをすることで、心理的適応を促進し自尊感情を高めることを目的とした「肯定的コミュニケーションプログラム」を導入した。このプログラムは、「言葉」に重点を置いた。日ごろから肯定的な声掛けがなされることによって、子供の思考の方向が肯定的に変わることを狙っている。

本研究では、このプログラムの効果を検証するために、まずアカデミー生を対象に年度初め(Pre)とそのひと月後(Post1)、半年後の(Post2)で自尊感情に変化があるかどうか比較した。次に、統制群として同じ年の発達期にある子供たちの自尊感情の変化を調べるために、宮城県内の子供たちをサンプリングし、同じ時期の自尊感情にどれくらい変化があるか検証を行った。最後に、その変化の推移についてアカデミー生との比較を行うことでプログラムの効果を検証する。

### Ⅲ. 方法

#### (1) 肯定的コミュニケーションプログラム(講演・講習)の構成と内容

まず、保護者を対象に、児童期の心の成長・発達に関する基礎的な知識、養育に関する基本的態度について学んでもらった。特に大切にしていたのが、「感情や場面を決定づける思考は「言葉」によって規定される」として、子供への具体的な声掛けの着目点、注意点について、グループワークなどを通して学んでもらうことであった(計3回)。

子供には、別セッションで目標を持つことの大切さ、目標設定の仕方について学習してもらった。

#### ①子供とのかかわり方(サポート)について、保護者プログラムの実施

- ・平成27年6月13日(土)9:30～10:50「子供への心理的サポート・成長評価」
- ・平成27年6月13日(土)13:05～13:55「自己管理と目標設定の仕方を学ぶ、交換日誌要領」

- ・平成27年7月11日(土)9:30～11:10「子供への心理的サポート2」
- ・平成27年11月7日(土)14:40～16:00「目標設定と交換日誌」

#### ②保護者とアカデミー生の交換日誌による肯定的なコミュニケーションの促進

常日頃から適切な声掛けが成されるよう、特に重要な他者である保護者と子供の間で交換日記形式による「肯定的な言葉による声掛け」を実行してもらった。

- ・期間：平成27年6月13日(土)～平成28年度3月19日(土)
- ・要領：本アカデミーが作成したシートに従い、親子の交換日記形式で保護者と本人のなかで肯定的な声掛けをしてもらった。具体的には以下のとおりである。
  - ① 子供は、毎日の生活記録を記入し、自らの行動を客観的に把握すること
  - ② 日々の目標に対しての振り返り、達成度を点数化する。
  - ③ ①②について、週に一回、保護者が読み、肯定的なコメントを加える。

#### (2) 調査の方法

##### ① 調査時期と調査対象

- アカデミー生各学年30名中、調査日出席者のみ
  - 4年生：Pre：H27.6.13(23名)、Post1：H27.6.28(25名)、Post2：H27.12.5(26名)
  - 5年生：Pre：H27.6.13(14名)、Post1：H27.7.11(10名)、Post2：H27.12.5(23名)
  - 6年生：Pre：H27.6.13(8名)、Post1：H27.7.11(8名)、Post2：H28.3.19(21名)
- 統制群(宮城県岩沼市の子ども)
  - Pre：H27.6～7月(4年421名、5年436名、6年467名)、
  - Post：H27.12～H28年1月(4年410名、5年412名、6年404名)
 岩沼市内の小学校すべての(欠席者を除く)子供たちのデータから、乱数表を用いてランダムサンプリングを行った4～6学年の各100名。

## ② 調査内容

東京都版自尊感情尺度<sup>5)</sup>：「自己評価・自己受容」因子8項目、「関係の中での自己」因子7項目、「自己主張・自己決定」因子7項目の3因子22項目を「そう思う」、「わりとそう思う」、「あまり思わない」、「思わない」の4件法で実施した。点数が高いほど自尊感情が高くなる。

この本研究で着目する自尊感情を測定する尺度は、従来ローゼンバーグの10項目からなる自尊感情測定尺度の訳語が使用されており、特に自己評価や自己肯定などを把握していたが、訳によって意味するところが異なる等の問題もがあった<sup>3)</sup>。また、2011年の調査<sup>6)</sup>によれば、自尊感情や自己肯定感が高い傾向にある子供は、進路の目標が明確で、友人関係も良好であることなどが示されたことから、自尊感情は他との関係性と深いかかわりがあることがわかっている。したがって、自己評価だけではなく他者との関係性での自分を評価できる測度として、本調査では、東京都版自尊感情尺度<sup>5)</sup>を採用した。本尺度は、自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることができる「自己評価・自己受容」、多様な人とのかかわりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在に気づく「関係の中での自己」、今の自分を受け止め、自分の可能性について気づく「自己主張・自己決定」の3因子で構成<sup>13)</sup>されている。

## ③ 分析ソフト

すべての検定は、統計ソフト SPSS for windows 22.0 バージョンを使用して分析した。

## IV. 結果と考察

### 1) プログラム導入前のアカデミー生と統制群の自尊感情の比較

Table1 は、アカデミー生と統制群の pre テストの自尊感情得点の尺度合計、各因子の合計点の平均と標準偏差を示したものである。t 検定（対応のない）の結果、両条件に有意な差および有意傾向があったのは、

4年生の「自己評価・自己受容」( $t(121) = -1.955, p < 0.1$ )、6年生の自尊感情合計 ( $t(106) = 1.8, p < 0.1$ )、「自己評価・自己受容」( $t(106) = 2.787, p < .05$ )であった。したがって、プログラム導入前の4年生は「自己評価・自己受容」だけが統制群のほうが高い傾向が認められたが、他は偏りがなかった。このことは、運動能力を審査されて選抜されたこと自体はほとんど自尊感情に影響を与えていないことも示唆している。5年生も同様に有意な偏りは見られなかったが、6年生は統制群よりもアカデミー生のほうが有意に自尊感情が高く、特に「自己評価・自己受容」が非常に高かった。このことは、アカデミー3年目を迎えていることに関わりがある可能性もある。

### 2) アカデミー生の自尊感情の変化

1) の変化について、一要因の分散分析（被験者間計画）により、Pre、Post1、Post2の3時点で比較し検討した。Table2～4の分散分析表は、自尊感情得点の尺度合計、各因子の合計点の平均と標準偏差を示したものである。Fig.2は、3因子の変化を図で表したものである。その結果、4～6年生の「自尊感情合計」において、有意差が認められた（4年生： $F(2,71) = 13.714, p < .01$ 、5年生  $F(2,44) = 5.08, p < .05$ 、6年生  $F(2,34) = 5.323, p < .05$ ）。

また、因子別に見てみると、4年生は「自己評価・自己受容」( $F(2,71) = 2.423, p < 0.1$ )に有意な傾向があり、「関係性の中での自己」、「自己主張・自己決定」では有意差が認められた（ $F(2,71) = 20.606, p < .001$ 、 $F(2,71) = 9.228, p < .001$ ）。5年生は、「自己評価・自己受容」に差は認められなかったが、「関係性の中での自己」、「自己主張・自己決定」に有意差が認められた（ $F(2,44) = 7.489, p < .01$ 、 $F(2,44) = 6.267, p < .01$ ）。そして、6年生も5年生同様に、「関係性の中での自己」、「自己主張・自己決定」に有意差が認められた（ $F(2,34) = 6.221, p < .01$ 、 $F(2,34) = 6.099, p < .01$ ）。

以上から、アカデミー生の自尊感情得点は特にPre-Post2間で有意に向上したといえる。また、「自己評価・自己受容」は、4年生に

プログラム導入による自尊感情の変化

Table1 アカデミー生と統制群におけるPreテスト比較  
4年生

	アカデミー生		統制群		値
	平均	SD	平均	SD	
自尊感情合計	2.83	0.39	2.96	0.48	-1.391
自己評価・自己受容	2.70	0.34	2.83	0.60	-1.955 †
関係性の中での自己	2.83	0.53	3.07	0.52	-0.164
自己主張・自己決定	2.94	0.43	2.99	0.58	-1.208

† $p<0.1$ , \* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$

5年生

	アカデミー生		統制群		t
	平均	SD	平均	SD	
自尊感情合計	2.88	0.29	2.89	0.46	-0.069
自己評価・自己受容	2.86	0.31	2.68	0.64	1.684
関係性の中での自己	2.95	0.45	3.06	0.52	-0.722
自己主張・自己決定	2.83	0.44	2.93	0.54	-0.612

† $p<0.1$ , \* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$

6年生

	アカデミー生		統制群		t
	平均	SD	平均	SD	
自尊感情合計	2.91	0.15	2.79	0.44	1.8 †
自己評価・自己受容	2.81	0.19	2.58	0.54	2.787 **
関係性の中での自己	3.07	0.21	3.00	0.48	0.874
自己主張・自己決定	2.84	0.28	2.78	0.58	0.301

† $p<0.1$ , \* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$

のみ有意傾向が認められ、5、6年生は変化がないことからこの因子の向上は、簡単ではないことも示唆された。

3) 統制群の自尊感情得点の変化

2)の結果を受けて、改めて発達期の同じ年代の同時期における一般的な自尊感情についてどのくらい変化があるか調べた。なお、ここで示している Post データは、アカデミー生 Post2 と同時期のものである。

Table5～7の分散分析表は、自尊感情得点の尺度合計、各因子の合計点の平均と標準偏差を示したものである。その結果、4年生5年生においては Pre と Post の間に有意差は見られなかった。しかし、6年生では「自尊感情合計」 $F(1,198) = 4.526, p<0.05$ 「自己評価・自己受容」 $F(1,198) = 3.953, p<0.05$ 、「自己主張・自己決定」( $F(1,198) = 4.809, p<0.05$ )に有意差がみられた。ここから、4、5年生は、ほとんど変化せず、6年生になって、得点が向上していることがわかる。

4) 6年生におけるアカデミーと統制群の比較

2)、3)の結果から、両群の6年生ともに肯定的に変化していることについて、比較・検討した。もちろんこの肯定的変化には、両群ともに6年生という小学校最終学年であり、学校ではリーダー的学年であったこと、さらに Post テスト実施時はちょうど卒業を目前に控えていたという、ライフイベントがかかわっている可能性もある。Fig.3は、両群の変化を視覚的に把握するために、自尊感情合計と各因子平均の変化を図示したものである(アカデミー生の Post は、統制群と同時期に採取された Post2 のデータを使っている)。これを見ると、両群の変化は必ずしも同じではないことがわかる。この時期の少年において伸びにくい「自己評価・自己受容」の得点は、アカデミー生がプログラム導入前(Pre)から高いことがわかる。ほかの因子も Pre、Post ともにアカデミー生が上回っており、統制群の子どもの自尊感情も同じく向上するものの、アカデミー生には及ばないことが示唆された。

Table2 アカデミー4年生1要因の分散分析結果

	Pre		Post1		Post2		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
自尊感情合計	2.83	0.39	2.90	0.31	3.28	0.25	13.714 ***	Pre<Post2
自己評価・自己受容	2.70	0.34	2.78	0.35	2.89	0.28	2.423 †	Pre<Post2
関係性の中での自己	2.83	0.53	3.09	0.35	3.56	0.31	20.606 ***	Pre<Post1,2
自己主張・自己決定	2.94	0.43	2.98	0.39	3.40	0.39	9.228 ***	Pre<Post2

† $p<0.1$ , \*\*\* $p<.001$

Table3 アカデミー5年生1要因の分散分析結果

	Pre		Post1		Post2		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
自尊感情合計	2.88	0.29	3.24	0.21	3.18	0.36	5.084 *	Pre<Post1,2
自己評価・自己受容	2.86	0.31	2.77	0.36	2.75	0.29	0.552	
関係性の中での自己	2.95	0.45	3.48	0.35	3.44	0.40	7.489 **	Pre<Post1,2
自己主張・自己決定	2.83	0.44	3.46	0.30	3.34	0.57	6.267 **	Pre<Post1,2

† $p<0.1$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

Table4 アカデミー6年生1要因の分散分析結果

	Pre		Post1		Post2		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
自尊感情合計	2.91	0.15	3.27	0.17	3.19	0.28	5.323 *	Pre<Post1,2
自己評価・自己受容	2.81	0.19	2.77	0.30	2.80	0.23	0.116	
関係性の中での自己	3.07	0.21	3.57	0.23	3.43	0.34	6.221 **	Pre<Post1,2
自己主張・自己決定	2.84	0.28	3.48	0.36	3.34	0.44	6.099 **	Pre<Post1,2

† $p<0.1$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

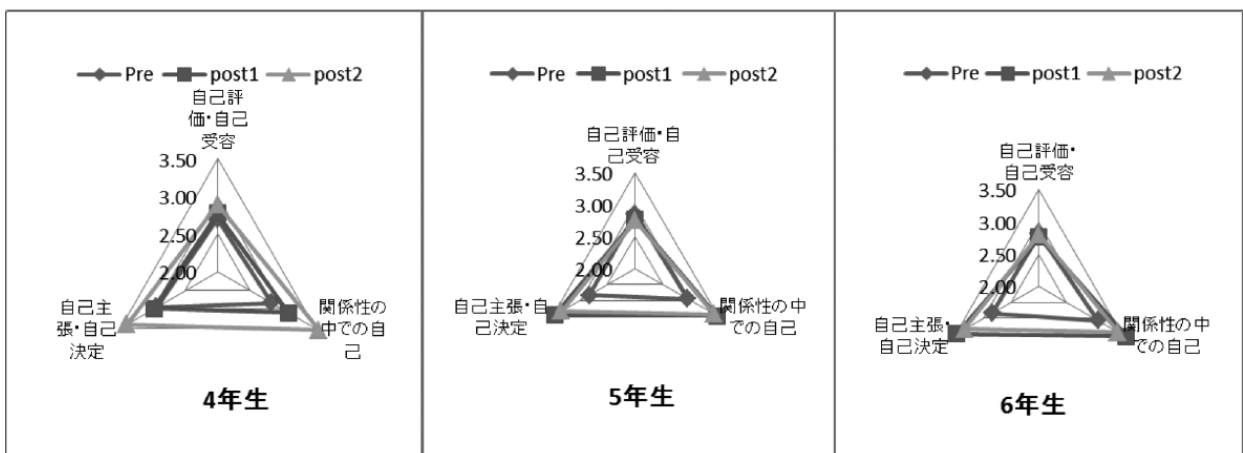


Fig.2 アカデミー生の自尊感情の変化(因子別)

プログラム導入による自尊感情の変化

Table5 4年生1要因の分散分析結果

	Pre		Post		F値
	平均	SD	平均	SD	
自尊感情合計	2.96	0.48	3.03	0.48	1.529
自己評価・自己受容	2.83	0.60	2.87	0.65	0.174
関係性の中での自己	3.07	0.52	3.16	0.52	1.868
自己主張・自己決定	2.99	0.58	3.08	0.56	2.250

$f_p < 0.1, *p < .05 **p < .01$

Table6 5年生1要因の分散分析結果

	Pre		Post		F値
	平均	SD	平均	SD	
自尊感情合計	2.89	0.46	2.93	0.45	0.375
自己評価・自己受容	2.68	0.64	2.68	0.66	0.002
関係性の中での自己	3.06	0.52	3.09	0.48	0.195
自己主張・自己決定	2.93	0.54	3.02	0.53	1.513

$f_p < 0.1, *p < .05 **p < .01$

Table7 6年生1要因の分散分析結果

	Pre		Post		F値
	平均	SD	平均	SD	
自尊感情合計	2.79	0.44	2.93	0.53	4.526 **
自己評価・自己受容	2.58	0.54	2.76	0.70	3.953 **
関係性の中での自己	3.00	0.48	3.09	0.53	1.658
自己主張・自己決定	2.78	0.58	2.95	0.57	4.809 **

$f_p < 0.1, *p < .05 **p < .01$

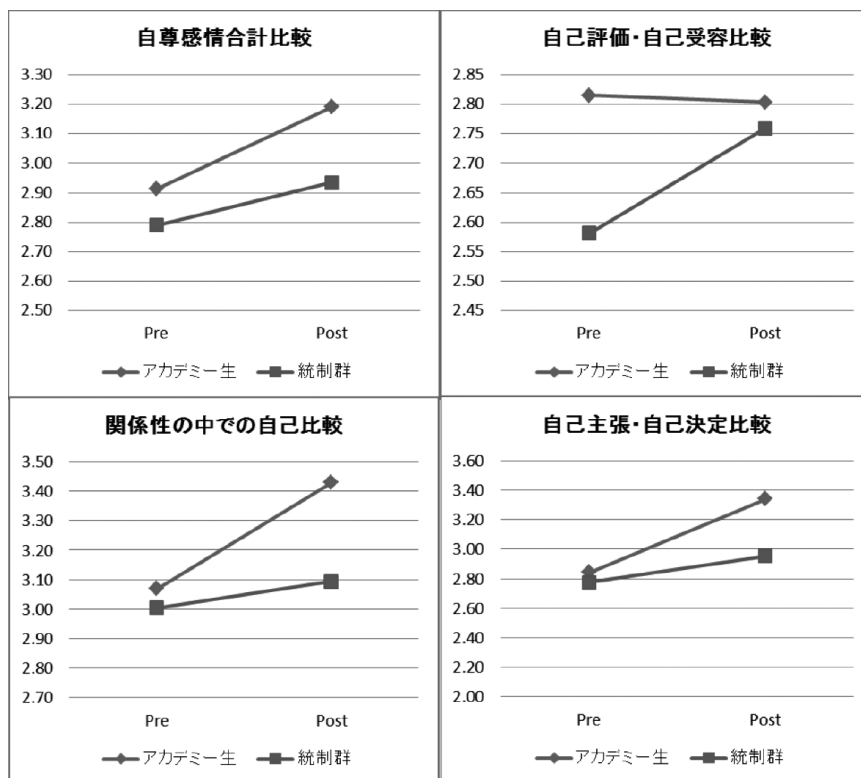


Fig.3 6年生の自尊感情の変化の比較

## V. まとめ

本研究の目的は、自分を肯定的に感じるために他者との関係性が非常に重要であるとの視点から、「講習・交換日記」等によって、子供にとっての重要な他者による評価や声掛けを意図的に肯定的なものに変えることを目的とした肯定的コミュニケーションプログラム導入の効果の検証であった。そのため、本研究では従来の自尊感情テストで測定できる「自己評価・自己受容」だけではなく、周囲との関わりである「関係の中での自己」、そして今の自分を受け止め、自分の可能性について気づく「自己主張・自己決定」の3つの視点で効果を検証した。

まず、アカデミー生が同時期の一般的な同学年の子どもたちとの間に差があるかどうか、肯定的コミュニケーションプログラム導入前で比較した。それによれば、むしろ4年生の「自己評価・自己受容」においてアカデミー生が低く、5年生では差は見られなかった。しかし、6年生になると全般的にアカデミー生が高くなり、特にこの時期には高く保つことが困難とされる「自己評価・自己受容」が統制群に比較して非常に高かった。

次に、アカデミー生に「肯定的コミュニケーションプログラム」導入による変化について検証した。その結果、5、6年生の「自己評価・自己受容」だけ変化が見られなかったが、同年代の子どもよりもアカデミー生の自尊感情が飛躍的に変化していた。特に、全学年において、「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」が大きく変化していることは、「肯定的コミュニケーションプログラム」の効果を裏付けているといえよう。このことをより明確にするために、アカデミー生の自尊感情の向上が統制群でも見られるかどうか、統制群の自尊感情の変化を検証した。その結果、統制群で、Pre-Post間に有意に差があったのは「自己評価・自己受容」、「自己主張・自己決定」の2要因であり、自分に対する気づき、肯定感が向上しているが、他者への気づき、社会の中での自分に関する因子である「関係の中での自己」はほとんど変化がない。一方、アカデミー生は「自己評価・自己受容」

はほぼ平行線であったが、ほかの因子は全て有意に、しかも統制群より高く変化している。ここから肯定的コミュニケーションプログラムの導入は、周囲への気づきやその中での自己発揮を促し、自尊感情を向上させていたと考えることができ、本プログラムの狙いは果たされたと思われる。

さらに、両群の6年生ともに肯定的に変化していることについて検討した。しかし両群の変化の推移を見てみると、Preテスト、すなわち初めから両群の自尊感情には差があり、アカデミー生は特に「自己評価・自己受容」が高い。これは過去の報告にもあるように、自分に肯定的な感覚を持ちづらい我が国の青少年の傾向の中にあって、著しい違いといえる。このことは、アカデミー6年生が2年間アカデミーの様々なプログラムを受けていることが寄与している可能性をも示唆するものである。

最後に、本研究から一般に自尊感情は短期間ではそれほど向上するものではないことが明らかとなったが、子どもにとって、保護者等の重要な他者の肯定的な声掛け、関わりが彼らの自尊感情に大きく影響を与えることが示された。

## VI. 課題

本プログラム終了後に、ご協力いただいたご父兄の方々にアンケート調査を実施したところ、共働きのご家庭では毎日の交換日記はかなり負担であること、子供が塾や習いごとなどで夜10時すぎに帰宅することも珍しくないことなどが明らかとなった。しかし、子供の一日の動きを把握し、何を目標にどれだけできたかを振り返る過程は非常に意味のあるものであったという意見もあった。このプログラムは継続することが非常に重要であるため、今後はもう少し日記を簡素化し負担を少なくすることも検討する必要がある。また、「自己評価・自己受容」を向上する方策も検討する予定である。

最後に、統計的な処理をしたとはいえ5年生6年生のサンプル数が少なく偏りがあったことは今後の課題である。原因に、5～6年生がスポーツ少年団等の主力となり、プログラムが大



会日程に重なることが多く、測定日にプログラムを欠席してしまい、データをとることが困難であった事情もある。今後は、郵送法によるデータ収集など全数での分析が必要である。

## Ⅶ. 参考文献

- 1) 虎杖真智子 (2014) 児童の自尊感情の発達に関する実践的研究 大阪総合保育大学大学院博士論文.
- 2) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (1992) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版.
- 3) 榎本博明・田中道弘 (2006) 自尊感情尺度の現状と課題 人間学研究, 4, 41-51.
- 4) 古荘純一 (2009) 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか－精神科医の現場報告－光文社.
- 5) 伊藤美奈子・若本純子 (2010) 学校現場で求められる自尊感情を図る尺度作成の試み 教育心理学研究, 639.
- 6) 慶應義塾大学 (2011) 自尊感情や自己肯定感に関する研究報告書.
- 7) 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター (2011) 高校生の生活と意識に関する調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－9. 自分について 国立青少年教育振興機構 33 - 36.
- 8) 小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並河努・脇田貴文 (2014) 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響—Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析— 教育心理学研究 62, 273-282.
- 9) H 26 みやぎ (夢・復興) ジュニアスポーツパワーアップ事業 みやぎジュニアトップアスリートマスタープラン.
- 10) 内閣府 (2007) 低年齢少年の生活と意識に関する調査 内閣府 <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/zenbun/2-1-8.html#2-1-8-3>
- 11) 中山勘次郎・西山康春・柳沢登 (2011) 児童用自尊感情尺度の検討 上越教育大学研究紀要 30.
- 12) 田島賢侍・奥住秀之 (2013) 子供の自尊感情・自己肯定感についての定義および尺度に関する文献検討：肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64. (2)19-30.
- 13) 東京都教職員研修センター (2011) 自尊感情や自己肯定感に関する研究 平成 23 年度東京都教職員研修センター紀要 10.

( 2016 年 5 月 31 日受付 )  
( 2016 年 8 月 4 日受理 )